

気象ステーションを用いたタマネギべと病防除適期予測の試み

タマネギべと病の防除適期を判断するシステムとして南あわじ市に設置の気象ステーションを用いて、薬剤防除の実証を行った。その結果、気象ステーション防除実践区はJAの防除暦どおりの慣行防除区と比べてほぼ同等の防除効果が認められ、大幅に農薬の散布回数を削減することができた。

内 容

薬剤散布はべと病の防除手段の一つとして大変重要である。しかし、少発生年に防除暦どおりにスケジュール防除を行うと過剰防除となってしまう恐れがある。また、経費と労力の面からも気象要因に基づいた根拠のある防除体系の構築は必須の課題である。そこで、気象要因に基づいた薬剤防除の有効性について検討を行った。

試験は2019～20年に淡路農業技術センター内圃場で実施した。試験に供試した気象ステーションはD社製のシステムで気温、風向、風速、湿度、日射等の気象要因を常時観測し、タマネギの主要な糸状菌病害の感染リスクを表示する仕様となっている。D社製気象ステーション防除実践区（以下、実践区）はタマネギべと病に対して感染アラートが出現したときに薬剤防除を行い、慣行区はJAの防除暦どおりの薬剤防除を行い、無処理区を設けた。試験期間中の感染アラート出現頻度は3月25日、4月13日、4月28日の3回であった。薬剤の散布履歴を表に示した。これによると薬剤

散布回数は、実践区で3回、慣行区で7回であった（4月27日の防除は26日から準感染好適が続いていたため実施）。べと病の発病状況は5月8日に調査した。実践区で平均発病株率12.3%、慣行区で同11.3%、無処理区で同30.8%であった。D社の気象システムに基づく防除は、べと病の感染リスクが低い年であれば、少ない薬剤散布回数で慣行と同様な防除効果が得られた。

今後の方針

気象要因を考慮した防除体系の確立は、他のシステムも含めて今後も継続して検討する。また、今後も関係機関と連携を密に薬剤以外の防除法も併せて検討して総合的な防除対策の確立を目指す。

岩本 豊（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

表 各試験区の薬剤散布履歴

	実践区	慣行区	散布農薬
12月6日		○	レーバフロアブル
2月21日		○	ピシロックフロアブル
3月3日		○	ザンプロDM
3月13日		○	ジマンダイセン
3月26日	○	○	リドミルゴールドMZ
4月10日		○	ジマンダイセン
4月14日	○		ジマンダイセン
4月27日	○	○	ジマンダイセン



写真 D社製気象ステーション